

家族関係に関わる自己変化の体験に関する検討
負の世代間伝達を防いだとするライフストーリーから

江刺香奈（東京大学）

An Examination of the Experience of Self-Change Related to Family Relationships
From life stories that claim to have prevented negative intergenerational transmission

Kana Esashi

Author's Note

Kana Esashi is a PhD Student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

This study explored the “The stories of self-change” of those who could tell “The life stories that prevented negative intergenerational transmission”. The results showed that the experiences perceived as the main cause of the breakdown of intergenerational transmission themselves almost overlapped with the “The stories of self-change,” and from the perspective of Dialogical Self Theory and the generation of a new and highly dominant internal position were found to be the main causes of the breakdown of intergenerational transmission.

In the situations where the dialogues was most active in the process, not only dialogue among multiple I-positions, but also voices recognizing internal positions were prominent. The perspective of this narrative that focuses on the internal position is considered to be unique to this study. The results of this study suggest that construction of “A life story that prevents negative intergenerational transmission” requires “A story of self-transformation” that is characterized by a narrative that recognizes oneself’s internal position, and “A story of self-transformation” may be a powerful support for “A life story that prevents negative intergenerational transmission”.

Keywords: Life Story, Dialogical Self Theory, Family Relationships, Self-Change, Intergenerational Transmission

キーワード：ライフストーリー，対話的自己論，家族関係，自己変化，世代間伝達

家族関係に関わる自己変化の体験に関する検討

負の世代間伝達を防いだとするライフストーリーから

1 背景・目的

1.1 本ワーキングペーパーについて

このワーキングペーパーでは、筆者が修士論文の続きとして行った研究を、活動報告として記す。そのため、この章では本研究の背景としての先行研究の他、修士課程での自身の活動報告の概要を記す。

1.2 先行研究

逆境的小児期体験の研究や愛着研究等から、虐待を始めとした不適切な被養育体験は、後に様々な精神疾患や適応障害を生じさせるリスクを増大させることが、これまでに数多く指摘されてきた (e.g., Felitti et al., 1998; 友田他, 2018)。さらに、そのような原家族関係における逆境体験を経て親になった子どもは、自身の伴侶や子どもに対しても原家族と類似した関係性を再現し不適応の様相を示す場合があるとも指摘されている (The Childhood Adversity Narratives, 2015)。いわゆる負の世代間伝達である。

世代間伝達 (intergenerational transmission) とは、親から子どもへ、ある特徴が引き継がれることを意味するが (工藤, 2020)、主にアタッチメントや虐待、多世代家族療法 (Multigenerational Family Therapy) やそれをもとに発展したジェノグラム (genogram) (家族の歴史や構造を図示したもの) によるアセスメントの文脈で使われてきた。有名なものとして、Bowlby (1969; 1973; 1980) のアタッチメント理論から発展したアタッチメントの世代間伝達の研究がある。アタッチメントとは、不安や恐怖の感情を低減するために他個体への近接

を通して安全の感覚を得ようとする行動傾向またはそれを支える心理—生理学的制御システムを指し (遠藤, 2021)、主に子どもが親との関係性の中で安心感を得ようとする文脈で使用されることが多い。Bowlby (1982) は、幼少期にアタッチメントの経験が内在化され築かれる、内的作業モデル (IWM) という親に対する心的表象が、親になった後に子どもとの関係性を育む中で活性化されることの母子関係の影響力について説明した。そこから様々な研究者が親子関係の文脈におけるアタッチメントの質をアダルト・アタッチメント・インタビュー (AAI) やストレンジ・シチュエーション法 (SSP) を使ってパターン別に調査し、アタッチメントの世代間伝達の検証を試みてきた (e.g., Main et al., 1985; Benoit & Parker, 1994)。これらの研究から総じて、子どものアタッチメントが安定か不安定になるかについて、養育者のアタッチメントの影響がある程度規定されるだろうと結論づけられている (遠藤, 2021)。

特に虐待などの不適切な被養育体験をもつ子どもは、無秩序・無方向型のアタッチメントを形成しやすいことが知られている (遠藤, 2021)。この無秩序・無方向型のアタッチメントスタイルをもつ子どもは、本来避難所としての養育者が恐怖や不安を与える存在となっているため、不可解な行動を示してしまうと言われている (Main & Hesse, 1990) が、この子どもの無秩序・無方向型と、それに理論的に対応するとする親の未解決型のアタッチメントスタイルとの一致率についても検証されている。メタ分析では一致率が高いわけではないことが示されつつも

(遠藤, 2021), 強い関連性が示された研究も国内で複数存在することから (Behrens et al., 2007), これらのアタッチメントスタイルが不適切な養育との関連性が示唆されてきた。

もっとも遠藤 (2021) は, これまでの研究結果から, 子どものアタッチメントの不安定さのみを直接的な因果論でその後の不適応な様相や精神病理に結び付ける考え方を否定しており, アタッチメントの世代間伝達の触媒として, 養育者の子どもに対する「敏感性 (sensitivity)」(Ainsworth et al., 1974) を筆頭に, 「情緒的利用可能性 (emotional availability)」(Biringen, 2000), 「心を気遣う傾向 (mind-mindedness)」(Meins, 1997), 「内省機能 (reflective function)」やそれにもとづく感情的コミュニケーションのパターン (Slade et al., 2005) などが想定されている。

また上記研究に派生して, 虐待の世代間伝達, すなわち被虐待体験をもつ者が虐待をする親になるかどうかに関する実証研究も行われてきた (e.g., 遠藤, 1993; 渡辺, 2016)。過去に被虐待体験を有する親は, そうでない親と比較して, 子どもを虐待する可能性が高いとする指摘もある一方で (e. g., Parker & Collmer, 1975; Conger et al., 1979), Kaufman & Zigler (1987) は虐待が次世代でも繰り返される確率は概ね $30 \pm 5\%$ と結論づけるなど, そうでない可能性も示され, こちらも単純な因果関係のみでは説明しきれない様々な要因がありつつ, ある程度の関連性が示唆されている。

世代間伝達の文脈に含まれる, 親から子へ引き継がれる対象として挙げられているものは, アタッチメントや虐待のみならず, 葛藤や未解決のトラウマ, 精神病理, 関係性の特質や行動特性, 対人関係の持ち方など様々である (遠藤, 1993; 渡辺, 2016)。例えば Kerr & Bowen

(1988 藤縄・福山監訳, 2001) は, 個人の精神的発達の程度が, その両親, そのまた両親の発達程度と関連すると指摘した。個人の家族からの情動分離の程度を「分化」という概念を用いて説明し, 分化度の低い両親間で不安や緊張が生じると, 第三者である子どもを巻き込んだ三角関係をつくり, 子どもにも低い自己分化が伝達され, 様々な問題が生じうるとした。この Bowen の理論と実践を元に発展したのが, 多世代家族療法である。家族の歴史をジェノグラム等を用いて整理し, 感情的な巻き込まれが多世代にわたって継承されているかをアセスメントし, 三角関係化された子どもが原家族から分化できるよう介入する (日本家族研究・家族療法学会, 2013)。

以上のように, 世代間伝達とそのメカニズムが探求され, 親の不適切な養育を再現する被虐待体験者への心理ケアが開発される一方で (e. g., Bowlby, 1982; 渡辺, 2000), 問題が生ずる前に負の伝達を断ち切る方略については十分明らかとなっていない。

被養育経験が伝達されないための要因として林・横山 (2010) はこれまでの先行研究から, 「自らの経験を振り返り語る能力」, 「親代わりになるような重要他者の存在」, 「社会的サポート」との大きく3つに分けて説明している。この3つのうち, 「自らの経験を振り返り語る能力」について, 林・横山 (2010) は具体的なエピソード等を意識して振り返ることができる内省力が, ネガティブな養育経験を伝達しない結果に関わるとした。類似して渡辺 (2016) も, 親が過去の辛い被養育体験を感情を込めて振り返り内省することができると, 自身の子どもの葛藤を伝達しにくい可能性を述べており, Hopkins (1990) は, 辛い原体験をもつも, その

経験を深く考え、感じ、理解しようとし、さらに安定した乳児を育てる親がいることを言及している。

以上のことから、負の世代間伝達は決まっているものではなく、外的環境や当事者の内的処理が大きく関わっている。また、後者である当事者の体験の受け止め方については、具体的にどの程度の内省や意識が必要かは自明ではないことから、この領域の探求は、負の世代間伝達の子防につながる可能性が考えられる。

1.3 前段階の研究と本研究の目的

上記先行研究から、筆者は世代間伝達を防ぐための方略として、過去の被養育体験に関する当事者の意識・内省と負の世代間伝達との関係性についての検討が必要だと考えた。そして、負の世代間伝達を防いだとする語り、すなわち過去に葛藤的な家族関係を体験した思い出がありながら、次世代の家族関係をより良い形で構築したとするライフストーリーを語る事ができる者を集め、インタビュー調査を実施した。(この研究の詳細については修士論文にまとめであり、ここで詳細の説明は割愛する。結果の概要を以下に記す。)

その結果彼らは、原家族体験やそれ以降の体験から得た、家族や自身へのあるべき接し方を最も強調して語り、それを辛い過去から幸せな現在に至る上向きのストーリーの説明づけに用いる傾向がみられ、混乱や矛盾をもたらす体験を、様々な経験と深い洞察から了解可能なストーリーに統合していることが示唆された。

さらに、彼らがなぜそのような語りを提示できたのかを、対話的自己論 (Hermans & Kempen, 1993) を用い分析・考察した結果、原家族体験で培った自己から、全く異なる自己へと変化し

ていく語りが共通してみられた。ここから、自己変化のストーリーが負の世代間伝達を断ち切るライフストーリーの提示と関連する、という仮説が浮上した。しかし、上記の研究は逐語データもそれほど多くはなく、詳細な説明や考察も不十分だと考えられたことから、新たに追加インタビューを実施してより詳細の検討をする必要があると考えられた。

以上のことから本研究では、負の世代間伝達を防いだとするライフストーリーを語る者から、原家族で培った価値観・考え方を大きく変えたとする自己変化のストーリーを抽出し、自己内対話の視点からそのストーリーにどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。

2 方法

2.1 対象者

前段階の研究の対象者であり、かつその分析結果で提示した特徴の全てに該当する者の中から、本研究ではハナコさん(仮名)1名を研究対象とした。前段階の研究では、葛藤的原家族体験および、現在の良好な家族関係について語れる者を集めるため、3つの条件(①既婚者もしくは子どものいる者であること、②子ども時代に家族関係における葛藤体験がある者、③次世代の家庭では②の状況が比較的に見られず、子どもと良好な関係を築けていると感じている者)を設定している。

ハナコさんは、40代後半の既婚者であり、現在は夫と別居して10代後半の子どもと二人暮らしをしている女性である。前段階のインタビューから得られたライフストーリーの概要を以下に記す。

原家族時代、父母間葛藤の仲裁役を担うこと

で、親の顔色を見て行動するようになり、自分の感情や欲求を押し殺すようになった。そして次第に自分自身のアイデンティティや存在意義が見いだせず葛藤状態に陥り、仕事から得る他者評価を欲するようになる。

結婚後ハナコさんは、子どもと良好な関係を築くことができ、子どもはのびのびと自己表現をしながら成長したようであった。ハナコさんは親が介入をしないことで、子どもの性質を伸ばすことが大切だとし、コーチングの勉強をしてより良い子育てを模索し実行したことが、子どもとの良好な関係の背景にあるのではと推察した。また様々な体験から、自分自身も欲求を表現できるようになったと語った。

2.2 データ収集

前段階の研究では2回分、その後本研究を進めるにあたり3回の追加インタビューを実施し、計5回のインタビューデータ全体を分析対象とした。前段階の研究でのインタビューでは、現在の良好な家族関係とその背景を聞く形で全体的なライフストーリーを聞き取った。追加インタビューでは、“原家族と次世代家族を比較した際の、次世代家族における家族関係のより良い違い”を直接的に聞いて整理した。その結果、①子どもは親の顔色を気にせず、自由に発言し、欲求を表現したり行動に移すことができる、②子どもは親のペースから独立し、自身のペースで動くことができ、強制・束縛が少ない、③子どもは父母間の諍いを見させられたり、調停させられることがない、という違いを確認した。その上で、このような状況に至る上で、深い関係を感じる体験について聞きとった。これが、結果における【自己変化のストーリー】の主要データにあたる。

2.3 分析手法

得られたデータの分析手法には、対話的自己論 (Hermans & Kempen, 1993) を用いた。これは異なるポジションをとる複数の自己 (I ポジション) との対話によって自己世界が形成されるとする自己の理論であり、I ポジションには、内部ポジションと外部ポジションがある。前者は自己の世界にいる複数の<私>であり (例えば<親である私>や<学生である私>)、後者は自己の外側から内在化した、他者や物である (例えば<父親>や<マンガ>)。このようなI ポジションはそれぞれ声をもち、I ポジション同士が対話的関係をもつことで、自己内にて語りの場が生じるものとされている。さらにI ポジションには支配性 (dominance) があり、対話の中での発言権の強さなどにより決定される。本研究ではこの考え方を使って、語りからみられるハナコさんの自己内対話の様相について分析した。

具体的手順は、藤井 (2017) を参考にした。まず、語りにどのようなI ポジションが見られるか検討し、その名称を付与した。結果として記すI ポジションの名称は<>を使って表す。次に、それらのI ポジションを図示しながら、複数のI ポジションの対話関係とその変化の特徴を、支配性とその移動に着目しながら捉え、語り手の語りに伴う自己の変化の特徴を分析・考察した。

3 結果と考察

ハナコさんがこれまで語った全ての語りを種類別に整理すると、大きく4種類のストーリーに分けることができる。

まずライフストーリーの一部として、前半に【原家族ストーリー】が、後半に【次世代家族ス

トリー】がある。【原家族ストーリー】では、子ども時代のハナコさんが、父母間の葛藤関係を取り持つために自身の感情を抑圧するようになり、次第に自身のアイデンティティや存在意義が分からなくなって苦しみ、成人後は仕事で得る他者評価を重視するようになる、というストーリーが語られた。【次世代家族ストーリー】では、親としてのハナコさんが子育てや自己表現について様々なことを学びながら子育てをし、子どもが親の顔色を気にせず自由に自己表現しながら育ったというストーリーが語られた。

この二つのストーリーの関係性について、自分が体験した子ども時代の苦しさを自身の子どもに与えずに済んだという【世代間比較のストーリー】の語りがあった。さらに、この【世代間比較のストーリー】に深く関係する体験として語られたのが、ハナコさん自身の価値観や行動が変わっていく【自己変化のストーリー】である。分析の結果、前者と後者は矛盾なく統合された内容になっており、ほぼ同じ話として捉えることができると考えられた。

時系列は、それぞれ若干の重なりはあるが、【原家族ストーリー】→【自己変化のストーリー】→【次世代家族ストーリー】となる。【世代間比較のストーリー】はこの3つ全てを俯瞰した視点で、インタビュー時点でハナコさんが語った内容とみられる。よって以下に、この3つのストーリーの中でハナコさんの自己内対話がどのように変化していくのかを説明する。

3.1 原家族ストーリー

両親間の諍いをなだめるなど、親子の役割が逆転していた原家族体験から、ハナコさんは外部ポジション<両親>を取り込み、自分の感情

の波を最大限に抑える内部ポジション<死んだ心電図のような私>を醸成させた。その<死んだ心電図のような私>が訴える苦しみを和らげるため、他者評価が得られる<仕事>を積極的に取り込むようになる(図1)。

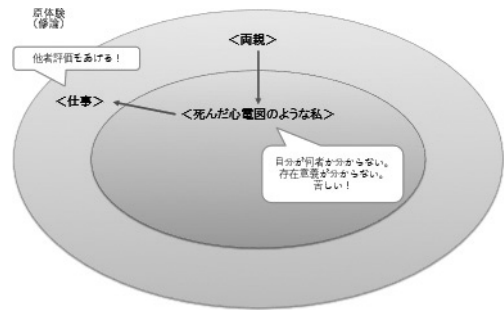


図1

3.2 自己変化のストーリー①： 連鎖の<知識>

この一方で、ハナコさんは親子の関係性について、「自分の立場を納得させようと」、「結構考えていた子どもだった」ため、「虐待・離婚は連鎖する」という<知識>を書籍から得て、子育てに関する学びの必要性を感じたことが語られた。この<知識>についてハナコさんは、「自分が嫌だったはずのことで」、「子どもの人生を左右することですら」、「そのまま(生きていく/過ごす)と」、「(同じ虐待・離婚を繰り返し)ちゃう」という言い方を繰り返し、虐待の連鎖が自分の意識のみでは防げない可能性があるものであることを強調した。そしてその<知識>に対し「(体験的子育ては)いけないんだな」「連鎖したくないな」と感じたという。この一連の語りは、<知識>によって新たな内部ポジション<連鎖させうる私>とそれに対する問題意識をもつ声が生成されたと解釈できた(図2)。

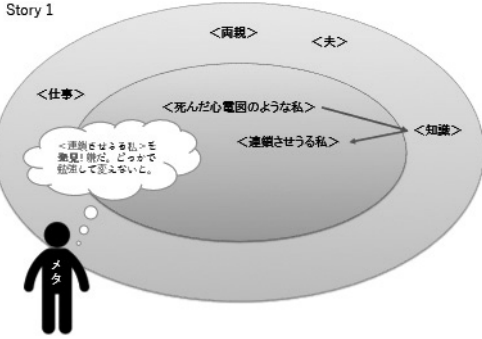


図 2

3.3 自己変化のストーリー②：

<比較する私>への恐怖

出産後、＜知識＞がより深い実感に変わり、改めて強い不安や焦りを感じるようになる。その背景に、ママ友との関わりを通し、自身とママ友の子ども同士を比較しそうになるという体験があった。たまたまハナコさんの＜子ども＞には先天性疾患があり、それによって否定的気分をもたらす比較をやめることができたが、ここで強調されていたのは、無意識に子ども同士を＜比較する私＞に気づいたこと、それに対し「怖い」と感じたという語りである（図 3）。ハナコさんは当時の心境として、「無意識にやってしまうものが怖いと思ったの」などと、「怖い」という表現を 10 回以上も使用している。

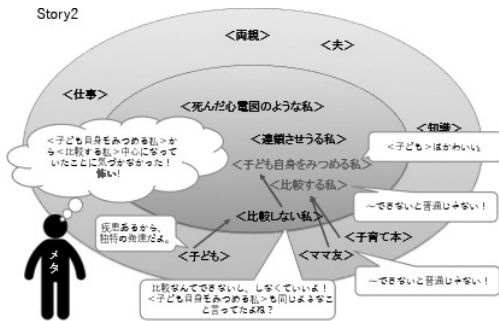


図 3

この恐怖する状況を回避するため、「何かを変えなきゃいけない」と模索し始めるハナコさんは、コーチングと出会い、それをもとに育児を工夫していく。（図 4）

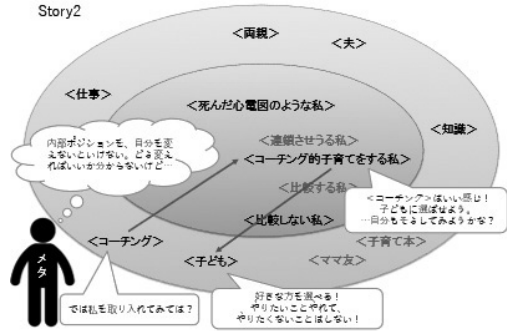


図 4

3.4 自己変化のストーリー③：

<うつ>をきっかけとした自己変化

育児をしながら、＜仕事＞を続けようとしたハナコさんは生活に無理が続き、＜うつ＞になってしまう。それによって評価を得られる＜仕事＞を失い「何もなくなっちゃった」などと絶望しつつ、「強制的に空白を作られ」て以前と違う行動をせざるを得なくなる。その結果、内部ポジション＜今までと違う私＞が新しく生まれた。そんな自分自身に対しハナコさんは強い否定的感情を強く抱くも、＜子ども＞がハナコさんへ「無償の愛」を向け続けていることを感じた体験から、「どんなダメな私でも」「生きていいんだ」と感じ、少しずつ回復していく（図 5）。またここでは、前項の次世代家族ストーリー②の後半の体験も同時に進行しており、仕事をしていたらできなかったであろう育児コーチングに通い始めることで、新たな出会いや考え方にも触れ、さらに自身の行動や考え方が変化していく段階であった。

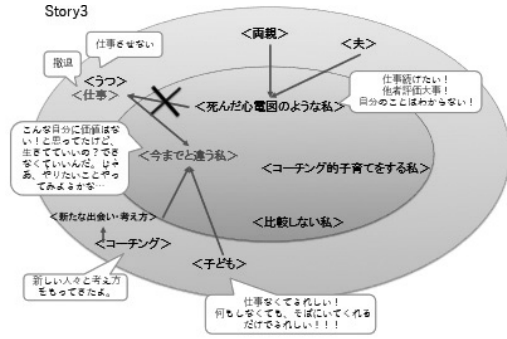


図 5

＜子ども＞の愛情によって＜今までと違う私＞が支えられ、「今までだったら絶対やろうと思ってなかったこと」であるボランティアやカルチャースクールなど「違うことやってみよう」と思い、新たな行動に踏み出すようになる。それによってさらに考え方が変わり、「今までこうーっと思ってたものが、(略) 違うものもあるなと」、「視野が広がった」とする感覚を覚える。

結果的に、「仕事をしてたら絶対ありえなかった」、「そういう生活って私の人生にはない、と 思った」体験を「前向きにやってる」とする＜やりたいことをする私＞へ変化していることに気がつき、「それをやりたくて (略) (やっている) のが、すごい、不思議だった」と改めて自己の変化を感じる当日の自己が語られた。

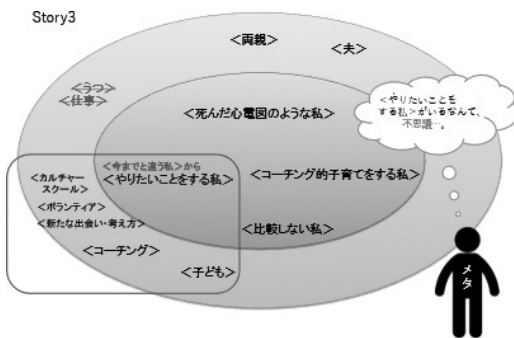


図 6

このような体験と並行して、ハナコさんは＜子ども＞の言動からさらに影響を受ける。否定的感情を自由に表現する＜子ども＞を目にし、感情表現を「自分が我慢してることも気づいて」、「言わせなきゃダメだって (子どもが) 言える環境を作った」と、行動面について＜やりたいことをする私＞から、内面の気持ちも大切に＜自分の欲求に従う私＞へ変化した (図 7)。

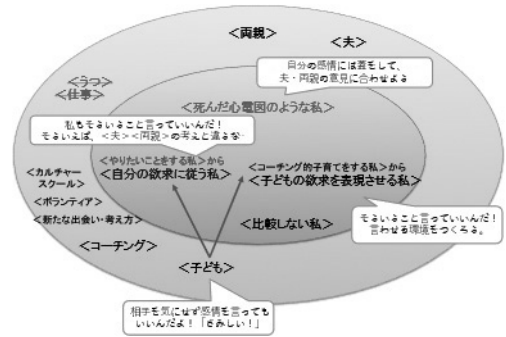


図 7

3.5 次世代家族ストーリー

ここまでの【自己変化のストーリー】の結果として、【次世代家族ストーリー】では＜子どもの欲求を表現させる私＞と、自身の考えや欲求を大事にすることで伴侶や両親、仕事との関係性が変化する＜自分の欲求に従う私＞が示される (図 8)。

以上がハナコさんの【原家族ストーリー】→【自己変化のストーリー】→【次世代家族ストーリー】における自己内対話のあり様とその変化である。原家族で培った＜死んだ心電図のような私＞の支配性が弱まり、新しい内部ポジションの生成とその変化 (＜今までと違う私＞→＜やりたいことをする私＞→＜自分の欲求に従う私＞), またその内部ポジションの支配性の

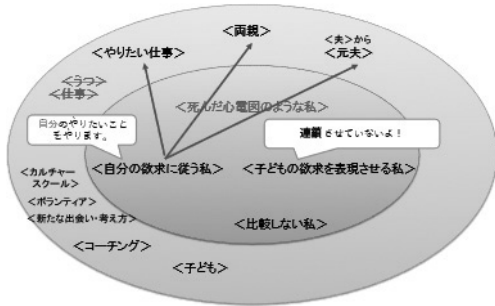


図 8

高まりがみられた。それと同時に＜子どもの欲求を表現させる私＞が現れることで、負の伝達を防いだとする【世代間比較のストーリー】が支えられるような構造をもっていると考えられる。

4 総合考察

以上の分析から、ハナコさんの自己内対話が活性化され、自己変化につながる内部ポジションの変化を強く支えたのは、外部ポジション、および内部ポジションを認識するメタポジションが大きな役割を担っていると考えられる。以下にその詳細を記す。

4.1 外部ポジションの動き

外部ポジションは対話的自己論によると、内部ポジションを生成させる重要な要素として位置づけられている (Hermans & Kempen, 1993)。しかしこの分析では、それだけではない複数の機能が浮かび上がった。

一つ目に、外部ポジションは特定の内部ポジションから発せられる苦しみや葛藤を和らげる機能があったと考えられる。

例えばハナコさんの＜仕事＞は、他者評価をもたらすことで＜死んだ心電図のような私＞を感じる存在意義への渴望を和らげ、ハナコさん

へ愛情を向ける＜子ども＞は、＜仕事＞を失い強制的に生成された＜今までと違う私＞へ肯定的な意味付けを与えた。外部ポジションは内部ポジションの葛藤を和らげることで、自己を支え、安定をもたらす機能があると考えられる。

二つ目に、上記と反対に外部ポジションは内部ポジションを葛藤状態にさせたり、もともとあった葛藤をさらに活性化させる機能も持ち合わせていたと考えられる。

例えば原家族時代、ハナコさんに大人の役割を求めた＜両親＞は、自己を抑圧する＜死んだ心電図のような私＞を生成し、自身のアイデンティティに苦しむきっかけとして語られている。これによってハナコさんは＜仕事＞を取り込むことで他者評価を得て葛藤を解消しようとし、育児中もそれを手放さず、うつ状態になるまで続けようとしたほどであった。また＜うつ＞は＜仕事＞を阻害し、＜死んだ心電図のような私＞の葛藤を再燃させ、＜今までと違う私＞に否定的意味づけを与えるきっかけとなっている。(しかしその後ハナコさんは＜子ども＞からの愛情に助けられ自己への認識を肯定的なものへ変化させる語りがみられた。) このように、外部ポジションは既存の内部ポジションを葛藤状態にさせる機能があると考えられ、それが後に新しい外部ポジションを取り込む心理的なレディネスとなっている可能性も示唆された。

このように、外部ポジションは新たな内部ポジションを生成するだけでなく、元々ある内部ポジションの苦しみを変容させる機能があり、鎮静化すると自己はその状態で安定し、活性化すると自己は新たな外部ポジションの取り入れが行われうると考えられる。

一方他の外部ポジションの取り込みを考察すると、原家族やうつ病、子どもの疾患はほとん

ど詳細の説明なく、当たり前のように外部ポジションとして登場している。このことから、家族や病気という存在は、心理的なレディネスに関係なく強制的に外部ポジションとして取り込まれ、強制的に新しい内部ポジションが生成されるという、自己世界に与える衝撃の強さが表れているともいえるだろう。

4.2 メタポジションの動き

本研究の分析で自己内対話が活発に見えた語りは、メタポジションの声が特に大きく現れた。もともと対話的自己論におけるメタポジションは、自己内対話における心理的機制の一つで、各Iポジションのもう一段階上で自己内対話を操作する、メタ的なポジションである（溝上, 2020）。しかしここでの「メタポジション」は、「既存の内部ポジションを認識し注目する別の自己」を便宜的に名付けたものである。というのも、結果で現れた「怖い」など危機感を訴えるIポジションの所在は、解釈のしようで他の特定のポジションの声（例えば＜比較しない私＞等）に位置付けることができ、様々な解釈が存在しえた。またここでの考察で重要とするのは、どのポジションが発している声かではなく、ある内部ポジションに対して少し離れた距離から注目し、声を発している自己がいるということである。

そして、外部ポジションをきっかけとして特定の内部ポジションを認識するメタポジションは、その内部ポジションに対する評価・葛藤を促す機能をもっていたと考えられる。

例えば、離婚や虐待が連鎖するとする＜知識＞によって、メタポジションは内部ポジションである＜連鎖させる私＞を認識し、危機感や育児を学ぶ必要性を感じた。また先天性の疾

患をもつ＜子ども＞や＜比較しない私＞の対話によって、メタポジションは＜比較する私＞を認識し、「怖い」と訴えた。ハナコさんの「怖い」という語りには、これまでの様々な経験を元にした複雑な思いが絡み合っていることが推察されるが、逐語上のデータから対話的自己論で分析すると、主に無意識に否定的結果に陥る自身に対する恐怖の声が強く生じているとみることができた。

そもそも自己内対話とは、Iポジションが別のIポジションに対して、「誤解」、「理解」、「反対」、「賛成」、「否認」、「疑問」などを向けることで生まれるポジション間の対話を指すが（Hermans & Kempen, 1993）、本研究では、あるIポジションへの「認識」が最も自己内対話を活性化させている場面の一つであり、外界に対してというよりも、自分自身に対して積極的（かつ否定的）な感情・評価を促していると考えられる。

さらに、メタポジションが特定の内部ポジションに対する否定的感情や否定的評価が生じることで、その解消、すなわち内部ポジションの変容に向かって、既存のやり方では注目しなかった新たな外部ポジションを取り入れる姿勢をも醸成されるという機能が考えられた。

例えば、メタポジションが＜連鎖させる私＞と＜比較する私＞に大きな危機感を抱く対話が生じた後、＜コーチング＞を取り入れて育児を工夫していく話が続いている。

対話的自己論によるメタポジションの機能として溝上（2020）は、複数のIポジションを同時に見渡してつながりを見たり評価を下し、Iポジション同士の衝突や葛藤があれば、そのIポジション同士の対話の場をつくることで調整したり（あるいは放っておいたり）、意思決定と人生の

方向性を見つけるベースをつくるものとしている。本研究におけるメタポジションは、最終的にその後の意思決定や人生の方向性を変容させる点で類似しているが、I ポジション同士の葛藤というよりも、特定のI ポジションを変容させようとする働きに見える点で、先行研究とは異なる視点から新たな機能を記述することができたともいえるだろう。

4.3 まとめ

本研究は、「負の世代間伝達を防いだライフストーリー」を語ることができる者の【自己変化のストーリー】を探索した。その結果、世代間伝達の断ち切りの主要因だと感じる体験それ自体が、【自己変化のストーリー】とほぼ重なり、対話的自己論の観点から、そのストーリーにおける活発な自己内対話の様子と、新しく支配性の高い内部ポジションが生成される様子がうかがえた。

またそのプロセスにおいて最も自己内対話が活発であった場面では、複数のI ポジション同士の対話のみならず、内部ポジションを認知する声が顕著であった。内部ポジションに目が向く自己の語りという視点は本研究の独自性でもあると考えられ、ここから、“負の世代間伝達を防いだライフストーリー”の構築には、自身の内部ポジションを認識する語りを特徴とする【自己変化のストーリー】が、力強い支えとなっている可能性が示唆された。

5 本研究の意義と限界

本研究は、これまで客観的な研究対象として扱われてきた“世代間伝達”という概念とその断ち切りについて、当事者の視点からどのようなストーリーとして語られるかを探求し、対話

的自己論の観点からある種の自己の認識が重要な役割を担っている可能性を示した。人々のライフストーリーの内容が千差万別であることが想定される中で、本研究のテーマとなっている自己変化の語りにこのような内部ポジションの認識の語りがある程度共通してみられるのであれば、これはライフストーリーの語りの特徴として特定の集団を浮き上がらせる可能性をもつであろう。また自己の認識自体は環境に完全に依存しない操作可能性をもちうることが予想されることから、家族関係に関わる援助方略を模索する一助として今後も探求する価値があると考えられる。

このような結果が得られた背景には、研究者とインタビューとの相互作用による影響があったと考えられる。本研究でその相互作用の詳細について焦点化して考察することはできなかったが、この二者関係のやり取りがこのようなストーリーの構築に関与したとはいえるであろうし、それはあらゆる成育歴をもつ人々が、インタビューでの相互作用を通して前向きなライフストーリーを構築する支えとなる可能性につながる視点かもしれない。

一方で、本研究は個別的事例検討のため、1名の事例から容易に一般化することが困難であることは言うまでもない。また、「世代間伝達の断ち切り」というテーマは先に研究者が設定してインタビュー前から提示しており、インタビュー自身を「世代間伝達を断ち切った代表者」としてインタビューを実施したため、自己呈示の範囲や内容にある程度制限をかけた可能性も考えられるなど、データ収集や分析から研究者の恣意性を完全に排除したとはいえないところが限界点であると考えられる。

今後は、本テーマに適う研究対象者を増やし

調査を続けることで、ライフストーリーと自己変化のストーリーの構造や関係性、自己のあり様を認識する自己内対話がライフストーリーの中でどのように現れてくるのかについて、より詳細に探索しながら仮説生成と仮説検証を行っていく必要があると考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D.S., Bell, S. M., & Stayton, D. J. (1974). Infant-mother attachment and social development: Socialization as a product of reciprocal responsiveness to signals, In M. P. M. Richards (Ed.), *The integration of child into a social world*, London: Cambridge University Press, 99-135.
- Behrens, K. Y., Hesse, E., & Main, M. (2007). Mothers' attachment status as determined by the Adult Attachment Interview predicts their 6-year-olds' reunion responses: A study conducted in Japan, *Developmental Psychology*, 43(6), 1553-1567.
- Benoit, D., & Parker, K.C.H.(1994). Stability and transmission of attachment across three generations, *Child Development*, 65(5), 1444-1456.
- Biringen, Z. (2000). Emotional Availability: Conceptualization and Research Findings, *American Journal of Orthopsychiatry*, 70(1), 104-114.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.(revised ed., 1982) (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子他訳, 1977『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss Vol. 2 Separation*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳, 1977『母子関係の理論 II 分離不安』岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss Vol.3 Loss: Sadness and Depression*. Basic Books. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳, 1981『母子関係の理論 III 愛情喪失』岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss Vol. 1 Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳, 1997『母子関係の理論: 愛着行動』三訂版 岩崎学術出版社)
- The Childhood Adversity Narratives (2015). Opportunities to Change the Outcomes of Traumatized Children. NCTSN.
- Conger, R. D., Burgess, R. L., & Barrett, C. (1979). Child Abuse Related to Life Change and Perceptions of Illness: Some Preliminary Findings, *The Family Coordinator*, 28(1), 73-78.
- 遠藤利彦 (1993). 「内的作業モデルと愛着の世代間伝達」, 『東京大学教育学部紀要』, 32, 203-220 頁.
- 遠藤利彦 (編) (2021). 入門アタッチメント理論: 臨床・実践への架け橋, 日本評論社
- Felitti, V., Anda, R., Nordenberg, D. et al.(1998). Relationship of Childhood Abuse and Household Dysfunction to Many of the Leading Causes of Death in Adults: The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study, *American Journal of Preventive Medicine*, 14 (4), 245-258.
- 藤井佑介 (2017). 「授業省察における教師の自己内対話: ハーモンスの対話的自己論をて

- がかりとして」, 『教育方法学研究』, 43, 25-36 頁.
- 林裕美・横山恭子 (2010). ネガティブな被養育経験をもちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について: 負の世代間伝達を断ち切るために, 上智大学心理学年報, 34, 33-42 頁.
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. (1993). *The Dialogical Self: Meaning as Movement*, Cambridge: Academic Press. (ヒューバート・J. M. ハーマンス, ハリー・J. G. ケンペン (著), 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳 (訳) (2006). 『対話的自己: デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』新曜社)
- Hopkins, J. (1990). The Observed Infant of Attachment Theory, *British Journal of Psychotherapy*, 6(4), 460-470.
- 工藤晋平 (2020). 『支援のための臨床的アタッチメント論: 「安心感のケア」に向けて』, ミネルヴァ書房.
- Kaufman, J., & Zigler, E. (1987). Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57(2), 186-192.
- Main, M., & Hesse, E. (1990). Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status: Is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism? In Greenberg, M. T., Cicchetti, D., & Cummings, E. M. (Eds.), *Attachment in the preschool years: Theory, research, and intervention*, The University of Chicago Press, 161-182.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in Infancy, Childhood, and Adulthood: A Move to the Level of Representation, *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50(1/2), 66-104.
- Meins, E. (1997). *Security of Attachment and the Social Development of Cognition*, New York.: Psychology Press.
- Kerr, E. M., & Bowen, M. (1988). *Family Evaluation: An Approach Based on Bowen Theory*, New York. Norton. (マイケル・E・カー, マレー・ボーエン著 藤縄昭・福山和女 (監訳) 福山和女・対馬節子・萬蔵英美子・荻野ひろみ (2001). 『家族評価: ボーエンによる家族探求の旅』, 金剛出版)
- 溝上慎一 (2020). 『社会に生きる個性: 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』, 東信堂.
- 日本家族研究・家族療法学会 (編) (2013). 『家族療法テキストブック』, 金剛出版.
- Parke, R.D., & Collmer, C. W.(1975). Child Abuse: An interdisciplinary analysis. In E. M. Hetherington (Ed.), *Review of child development research*, University of Chicago Press.
- Slade, A., Grienenberger, J., Bernbach, E., Levy, D., & Locker, A. (2005). Maternal reflective functioning, attachment, and the transmission gap: A preliminary study, *Attachment & Human Development*, 7(3), 283-298.
- 友田明美・藤澤玲子 (2018). 『虐待が脳を変える: 脳科学者からのメッセージ』, 新曜社.
- 渡辺久子 (2016). 『母子臨床と世代間伝達』, 金剛出版 (新訂増補, 2000).